

第30号 通巻第7巻第1号

1987年1月1日発行

守山市立埋蔵文化財センター

TEL 0775-85-4397

〒524-02

守山市服部町2250番地

新年を迎えて

年が改まり、昭和62年の到来です。一年のスタートに際して、人それぞれ、新たな思いで過ごされている事でしょうが、この埋蔵文化財センター職員一同、3月までの残り四半期の間を、新年度に生かすべき糧を得られるように一層努力していきたいと考えています。

さて、10月以降12月までの発掘調査も多く実施されていますので、その成果を中心に報告し、区切りとしたいとおもいます。

発掘調査だより

現在までのところ、「暖冬」と言ってよいおだやかな日々が続いており、氷、霜による地表面のぬかるみも未だなく、各遺跡調査の作業も順調にこなしています。

それでは県教育委員会実施調査3件を含む6件の成果を報告します。正福寺、吉身西遺跡は既に現地調査を終了していますが、他は現在も調査続行中ですので、気軽に見学下さい。（ただし調査担当者の了解を得てからお願いします。）

1 吉身西遺跡の調査

昨年度に引き続き、守山町字南高田一帯で施工される土地区画整理事業に伴って、吉身西遺跡の発掘調査を実施しています。所在地は県立成人病センターの前面に広がる水田、畑地で、道路、溝建設地と保有地を調査の対象としています。

前年10月より12月まで約2ヶ月の調査期間を要しましたが、昨年度を含めた成果は概略図（図-1）のとおり、弥生時代中期の方形周溝墓24基をはじめ、古墳時代の竪穴住居、溝、土坑そして井戸跡など平安時代にまで及ぶ多様なものとなっています。

道路、溝建設地という面的に限定された調査ですが、現状でも24基を数える方形周溝墓の検出は、市内では服部遺跡に次ぐもので、大規模な墓域が形成されていた事が想像できます。

開発が頻発する地域ですので、これからもそれに伴う発掘調査が予想でき、吉身西遺跡の東西に位置する金森東遺跡、下之郷遺跡を含めた当地一帯の集落形成と墓域の関係は、近い将来より鮮明に把握できるものと思われまゝす。守山の古代の様子を知る有益な資料となることでしょう。

2 正福寺遺跡の調査

正福寺遺跡は、「近江輿地史略」他にその名を留める正福寺を比定する遺跡で、守山町地先に所在する寺院跡として周知されています。しかしながら、わずかに記録が見られる他は、その存在を傍証するものは一切なく、また近隣の、例えば下之郷、吉身西遺跡などが、発掘調査によって実態解明を着実に進めているのに比べ、近年まで調査の手ものびなかつた遺跡でもあります。

昨年、当遺跡分布地内でも初めて発掘調査が実施されましたが、大きな成果を得るまでには至らず、今日まで依然として実態を把むことができませんでした。そういう経緯から、今回の発掘調査には大きな期待が寄せられていました。調査場所は守山町字横枕で、市道赤野井・吉身線の南西約50mに位置する現況水田地で、面積は約400㎡をはかりまゝす。

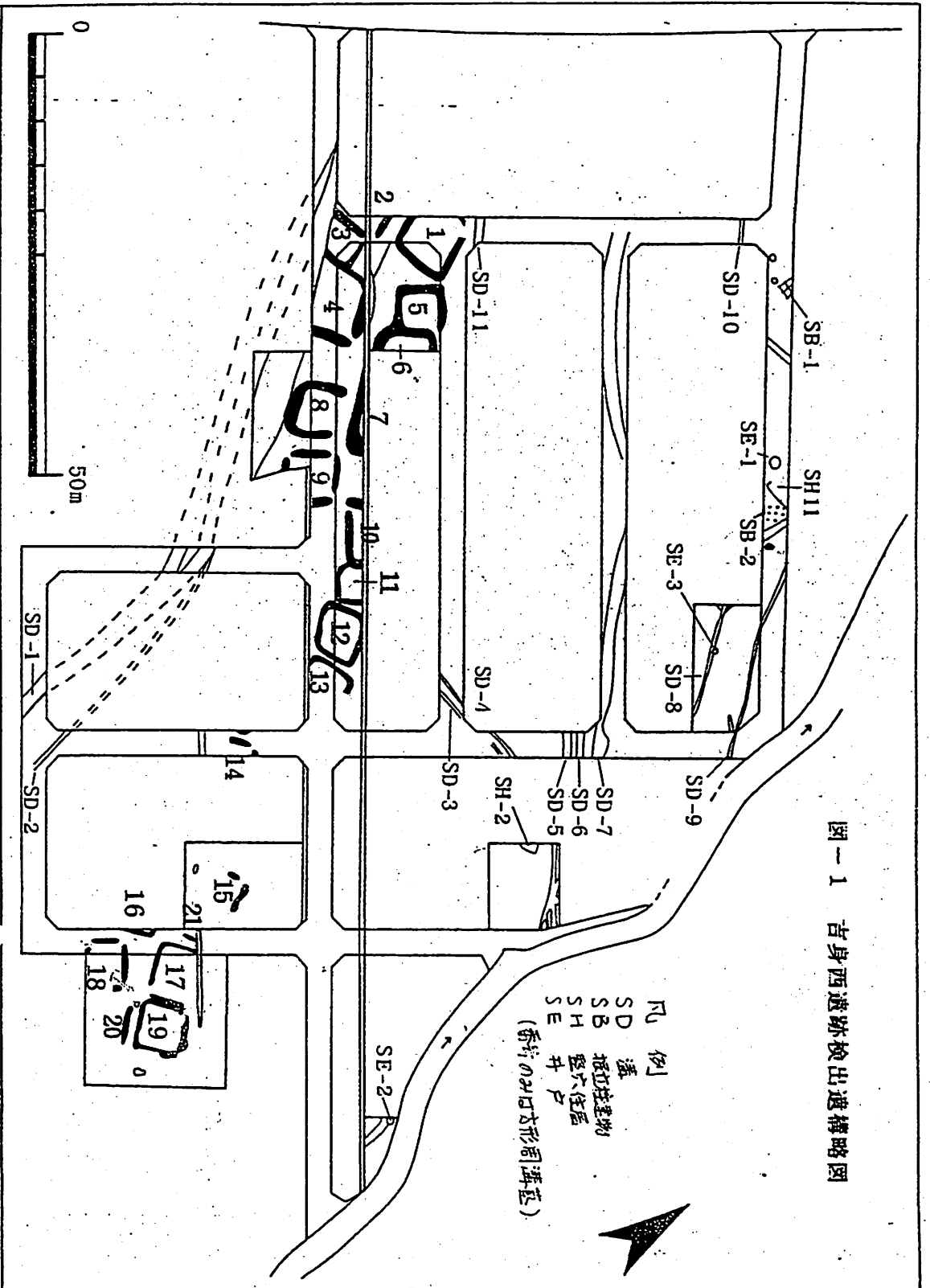
調査開始は61年12月28日、完了は12月6日と10日間の日程となりましたが、耕作土直下より、図(図-3)のとおり方形周溝墓(SX-1)1基、溝(SD-1・2)2条、そしてピット7穴を検出しました。

まず方形周溝墓は、残念ながら西辺が部分的に調査区外となりますが、溝端から溝端まで約10.5mの規模を有します。幅約1.5m、深さ約60cmを遺存する周溝は、現状から特徴的で、西辺の中央が陸橋状となり、とぎれるものと推察でき、市内検出例の中でも特徴的な形態と言えます。(下之郷遺跡で検出した周溝墓1基が同様に中位でとぎれる形態を有します。)

周溝内よりの遺物の出土はなく、この周溝墓の築造時期を知る決めてはありませんが、周溝墓東方より唯一出土の壺は弥生時代中期の特徴をもっており、一応の築造時期を弥生時代中期と考えている状況です。

以上、検出周溝墓は、正福寺遺跡の本来的な性格を有する成果とは言えませんが、近隣の下之郷、吉身西遺跡において見い出される弥生時代中期の集落、墓跡と密接に関わる遺構であり、当地一帯の古代を考えるうえで、造境著しい地域だけに、更にそれを躍進させる資料として役立つ成果と言えます。

図一 1 吉身西遺跡検出遺構略図



凡例
 SD 掘出建物
 SB 直立建物
 SH 竪穴住居
 SE 井戸
 (橋桁のみ口方形周溝区)

圖-2 吉身西、正福寺遺跡調査位置圖

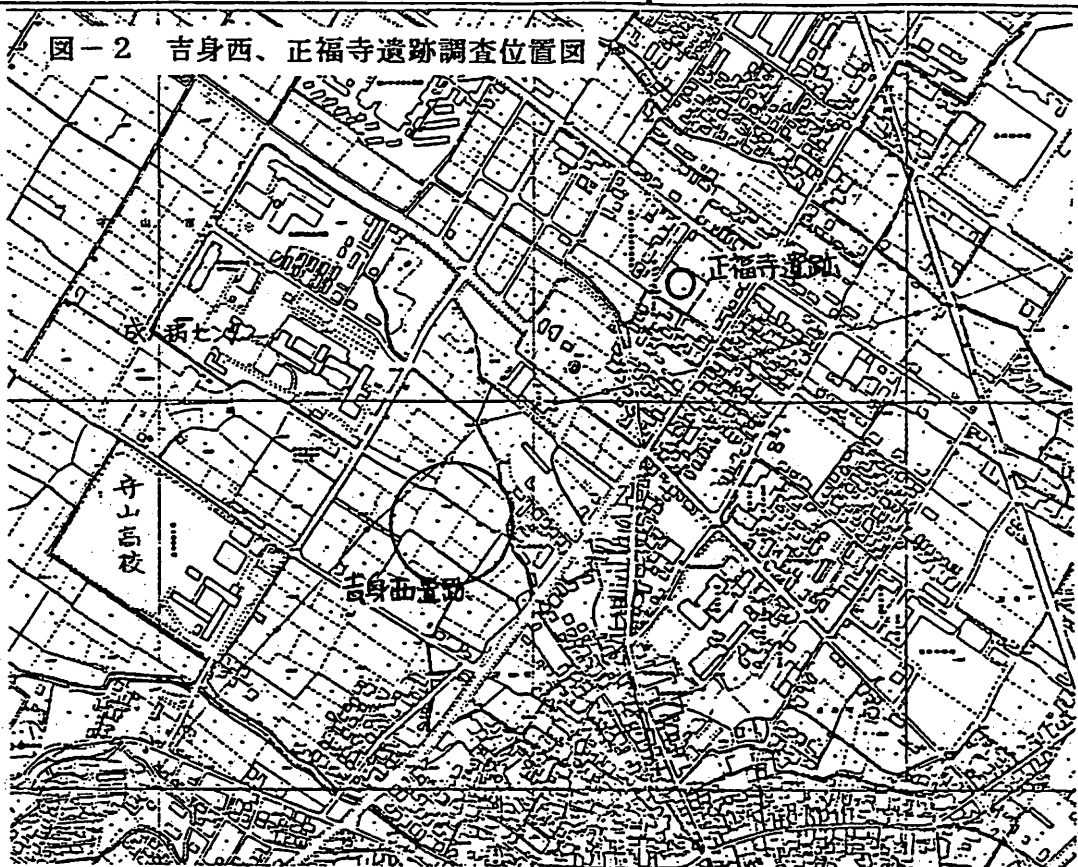
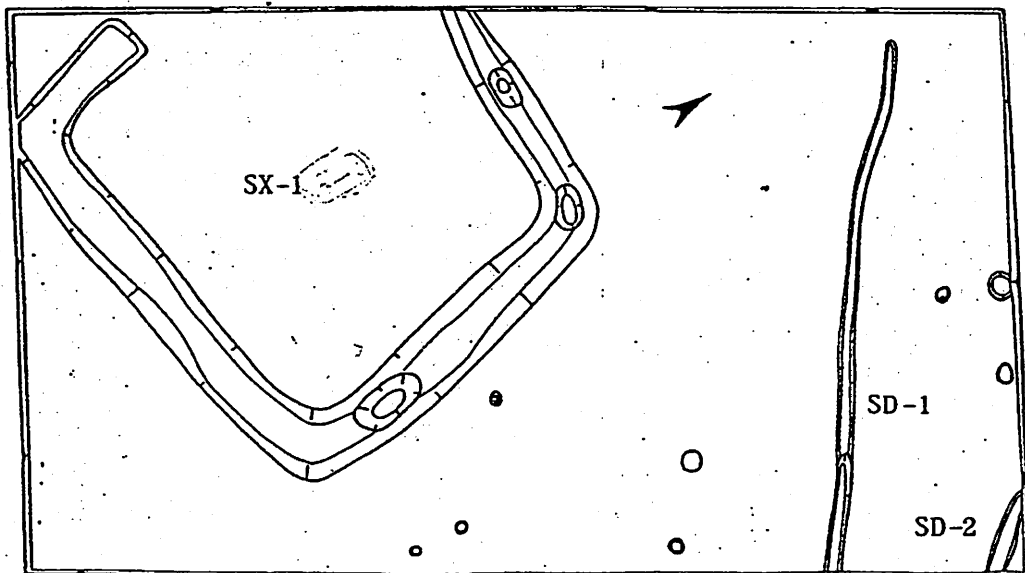
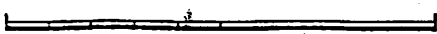


圖-3 正福寺遺跡検出遺構図



(0)  (10m)

3 川田遺跡の調査

10月初旬から始めた川田町、川田遺跡の概要について報告します。今回の調査区は合ノ北という小字名を有し、その付近には合ノ西、合ノ元など「合」という地名を多く残しています。伝承では、室町時代の末頃に、この地に合村という村が出現し、江戸時代の大洪水により廃村となったといわれています。文献記録では17世紀代に合村の位置と住人が確認できる絵図と過去帳があり、合村の存在が想定されていました。この想定地から北東方向に約200mの地点にあたるA地区の調査では、鎌倉時代（13世紀前半代）の掘立柱建物跡と溝跡が検出され、文献記録よりも400年以上さかのぼり、村が形成されていた事がわかりました。出土した遺物は、黒色土器と呼ばれる碗や皿、支脚付羽釜などの土師器類が多く、少量の陶器類が伴っています。現在、合村想定地に近接したB・C区を調査中ですが、第1面でコの字状の区画溝や耕作跡、第2面では鎌倉時代の溝などが検出されています。下層には、古墳時代後期の須恵器、埴輪を含む遺物包含層があり、更に最下層では弥生時代の遺構面が想定されています。

図-4 川田遺跡調査位置図 (A~C区)

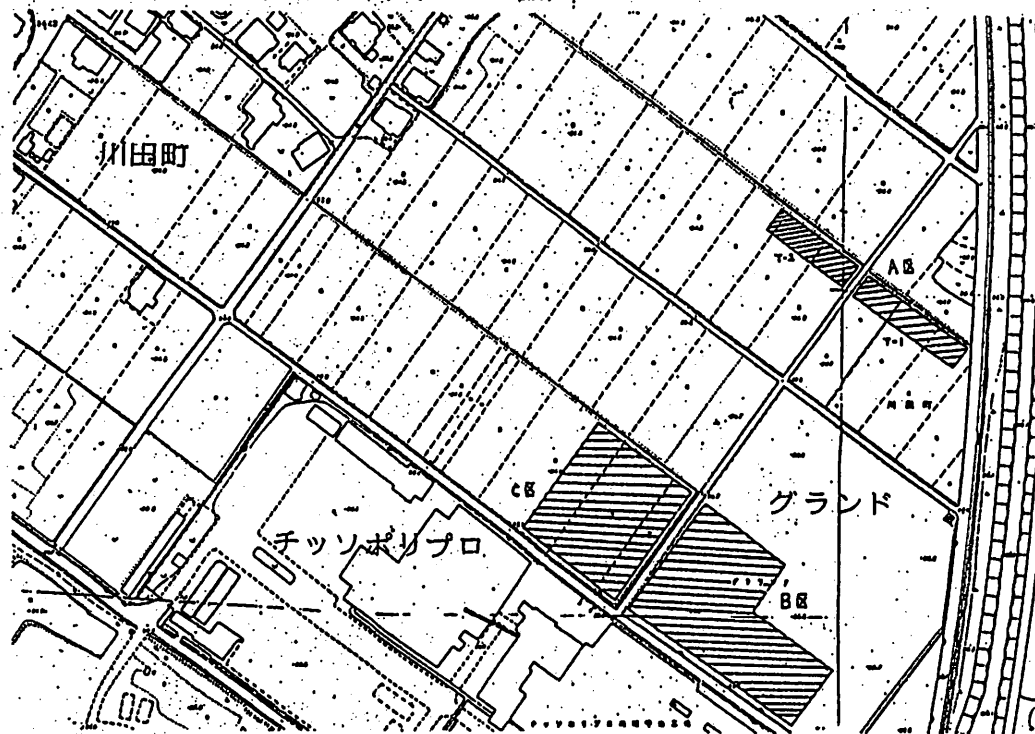
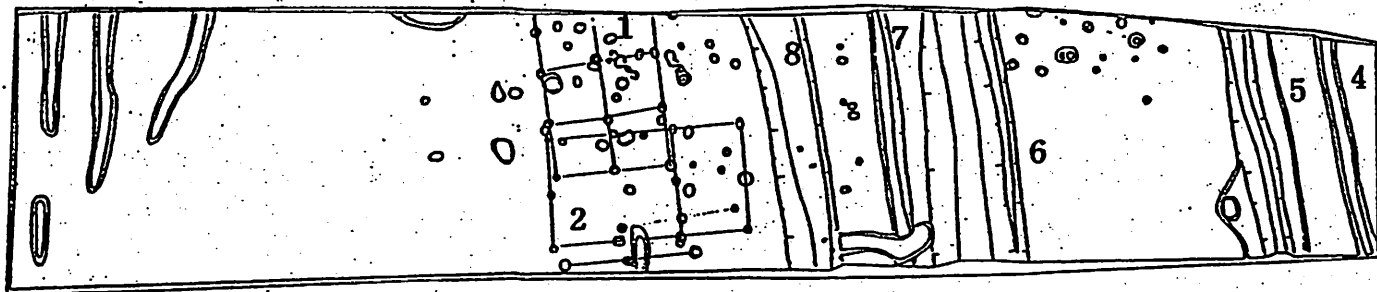


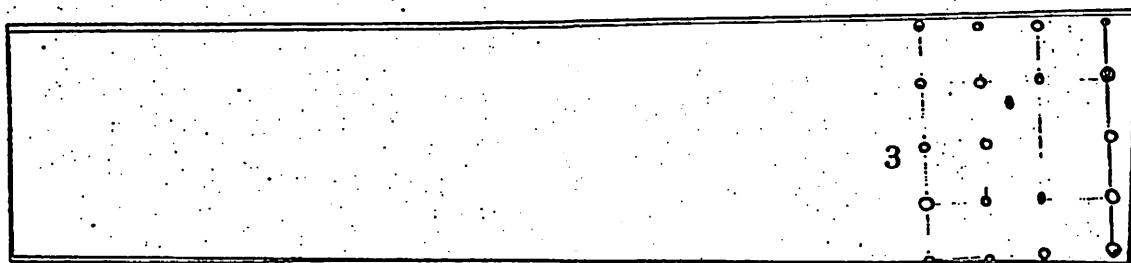
図-5 川田遺跡検出遺構図 (A区 T-1・2)



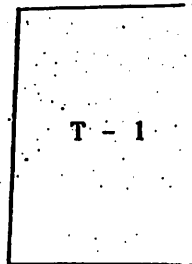
(T - 1)

1 ~ 3 掘立柱建物

4 ~ 8 溝



(T - 2)



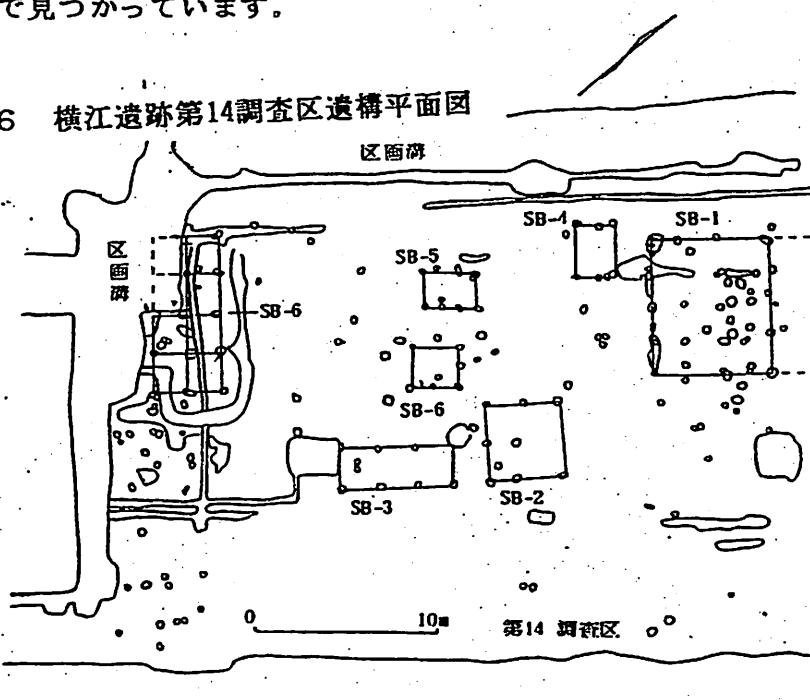
4 横江遺跡の調査（県教育委員会実施調査）

昭和58年に開始した横江遺跡の調査も4年目をむかえています。今回の「乙頁」では、第14調査区・第15調査区で検出された古墳時代と中世の遺構について、その概要を報告したいと思います。

第14調査区では昨年までの調査で見つかった、溝で区画された屋敷の続きが検出されています。屋敷の規模は現状では30×40mですが、北側が今年度の調査区外であるため全体の規模は明らかではありません。屋敷内には掘立柱建物・溝・土壇等が検出されています。建物はSB-1（4間×3間以上）・SB-2（2間×2間）・SB-3（3間×1間）・SB-4（1間×1間）・SB-5（3間×1間）・SB-6（1間×1間）・SB-7（4間×2間以上）の7棟を検出しています。うちSB-1・2・3の柱穴には礎石と考えられる石が残存しているものがあり、この3棟は礎石建ちの建物であったと想定できます。SB-1は中でも規模が大きく、この屋敷の主人の住まいではないかと考えられます。

第15調査区では古墳時代の遺構として、方形周溝墓と掘立柱建物、そして溝・土壇が検出されています。方形周溝墓は5基検出されていますが、最大規模周溝墓は1辺約13mをはかり、掘立柱建物は4間×2間の建物をはじめ5棟以上が検出されています。これらの遺構群は、南北に流れる旧河道に壊されたような形で見つかっています。

図-6 横江遺跡第14調査区遺構平面図



5 笠原南遺跡の調査（県教育委員会実施調査）

県道工事に伴い、10月より実施している調査で、この程平安時代前期の地方豪族の館跡と思われる建物群が見つかりました。

建物群は図-8のとおり、中央を流れる幅2mの溝（SD-1）によって二つの区画に分かれています。溝より南側には2間×2間以上の建物が3棟（SB-1～3）、北側には柵（SA-1）で囲まれた3間×3間以上の建物（SB-4）をはじめ、3間×1間以上（SB-5）、2間×2間以上（SB-6）各1棟の計6棟が整然と配置されています。建物の柱穴は1辺約60～80cmの方形の掘方をもち、中には直径約20cmの柱が残存している例（20本）もあります。遺物は9世紀中頃から後半にかけての黒色土器、土師器、灰釉陶器、須恵器などが出土しています。（去年は帯金具が見つかった）中でも「越殿（こしとの）」・「越家（こしいえ）」・「縣大家（あがたのおおいえ）」と土器に書かれた古代の文字が、豪族の名前を示すものだと注目されています。

県の調査担当者は「姓氏辞典によれば、墨書きされた縣氏の出自は美濃・越中・越前、そして越氏が和泉・越後とされており、建物の所有者をひとりと考えれば、越前・越中出身の縣氏がその出身地からこのあたりでは越と呼んでいたと解釈するのが妥当であると思われます。野洲郡の明見郷推定地の1つである守山市荒見町地先（笠原南遺跡）で見つかった館跡は、その所有者の名前を縣・越という墨書土器から推定することができ、又館の建物配置がわかるなど、全国的に見てもたいへん珍しい例であるといえるでしょう。今後条里制施行以後の集落のあり方や館内の建物配置の問題などの研究面で、古代史解明に大きな手掛かりになるのでは。」と話しています。

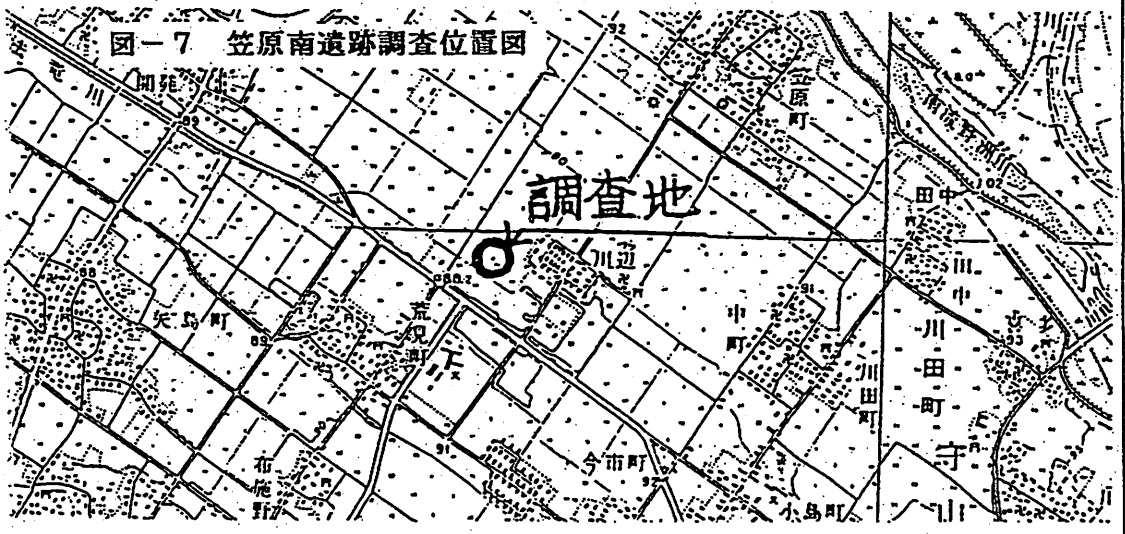
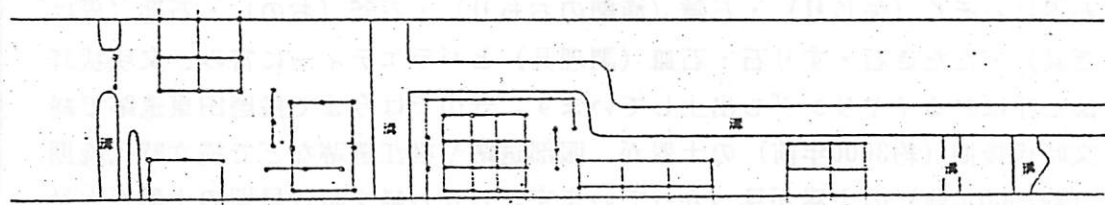


図-8 笠原南遺跡遺構平面図

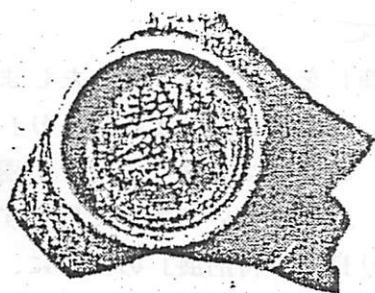


○一柱が残存していないもの
●一柱が残存しているもの

0 10m

出土墨書土器

「越殿」



「越家」



「縣大家」



6 赤野井浜遺跡の調査（県教育委員会実施調査）

赤野井湾で実施されている調査で、縄文時代早期末頃（今から約8000年前）の土器や石器が数多く見つかっています。この調査は琵琶湖総合開発に伴うもので、琵琶湖に矢板を打ち込み、水を排水した後土を掘り下げていくという方法で行なわれています。

縄文時代早期末頃の土器や石器は水面下約3.5mの地層から見つかりました。石器は石ぞく（矢じり）・石錘（漁網のおもり）・石斧（おの）・石匙（皮はぎ具）・たたき石・すり石・石皿（調理具）とバラエティーに富み、又塊状耳飾と呼ばれるイヤリングも出土しています。守山では今まで播磨田東遺跡で縄文時代後期（約3000年前）の土器が、服部遺跡や横江遺跡などで縄文時代晚期（約2600年前）の土器が見つかっています。しかし縄文時代早期の土器が大量に見つかったのは今回が初めてのことで、たいへん重要な発見といってよいでしょう。そして琵琶湖湖底よりの出土という事は、縄文時代の琵琶湖の水位が現在よりも低かったことを裏付けています。今から約8000年前、守山に住んだ縄文人達は湖の魚や近くの獣をとったり、木実を拾ったりしてくらしていたと考えられ、出土した土器や多様な石の道具がそれを物語っています。

（笠原南遺跡、赤野井浜遺跡の調査報告にあたり、調査の実施主体である(財)滋賀県文化財保護協会よりの資料を受け掲載することができました。）

秋季特別展について

昨年11月2日～24日の期間、「古代装飾」をテーマに開催いたしました秋季特別展には、多数の来館者がありました。「講演会」「土器づくり」の開催行事では、参加者の熱心に耳を傾ける様子、あるいは真剣な表情で土器を作成する様子を見、充実感を覚えた次第ですが、広報について多分に反省すべき点があり今後にかかしていくつもりです。より良い「特別展」のために、御意見、御要望をお願いします。

後記

厳寒最中の「新春」という言葉には、新旧暦のズレであっても、微妙に心を勇気づけてくれる「やさしさ」を覚えます。これから2月に向け、一段と厳しさは募るばかりですが、季節を先取りする言葉に、やがて巡り来る春に思いを馳せて、今は寒風に負けずにがんばるつもりです。

馬耳東風